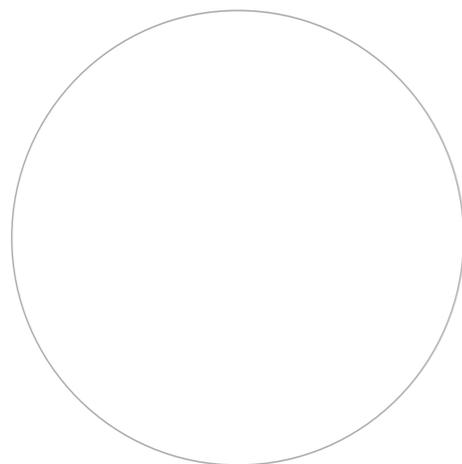


千年のかくれんぼ



四国 大歩危 祖谷

千年のかくれんぼ
山と暮らすこと
Tokushima/Oboke Iya
Concept Book



にし阿波～剣山・吉野川観光圏
<https://nishi-awa.jp>

問い合わせ先
●一般社団法人そらの郷
〒778-0005 徳島県三好市池田町シマ995-1
Tel:0883-87-8988 Fax:0883-72-0753
E-mail:soranosato@nishi-awa.jp
●三好市観光案内所
〒778-0003 徳島県三好市池田町サラダ1810-18
Tel:0883-76-0877 Fax:0883-76-0876
E-mail:info@miyoshi-tourism.jp



三好市公式Instagram
#miyoshifinder

三好市公式観光サイト

大歩危祖谷ナビ 検索

<https://miyoshi-tourism.jp/>



まあだだよ

続きはそらの郷で



「まあだよ」

ずっとそう思ってきました

山の暮らしや魅力は理解されないと
だから「まあだよ」

両目を覆ってしゃがんだまま

けれども

二十一世紀になってヒトは

立ち止まりふり返ることの

大切さに気付きました

便利を追求するばかりでは

ふとむなしくなること

めまぐるしい時のなかで

何かを置き忘れてきたこと

だから

「もういいよ」

山の暮らしが守り続けた

千年を生き抜く知恵を

今こそちゃんとお話しします

徳島県の山あい大歩危・祖谷地方

ココロの宝さがしが始まります

山と暮らすこと





目次



- 02 朝霧の舞
- 06 山に分け入る

森の中の孤島

- 08 天空の村・かかしの里
- 10 茅葺き民家と石垣の里
- 14 民俗芸能を守り抜く里
- 16 伝説の里

かくれんぼの情景

- 18 花と樹の詩

山の名物

- 20 祖谷の粉ひき節ものがたり
- 24 天空に香るお茶ものがたり

かくれんぼの情景

- 28 川の幻想
- 30 溪谷アート



川と生きる

- 32 水のワンダーランド
- 34 吉野川グリーン
- 36 かずら橋の夢



山の秘密

- 38 もうひとつの平家物語
- 40 妖怪が生きる森
- 41 美味しい秘密



かくれんぼの情景

- 42 宙の溪谷

山のおもてなし

- 44 山暮らしの夜



- 48 大歩危・祖谷地方の地図・お泊まり処



なつかしい発見

徳島県三好市池田町から国道32号を高知県に向かうと、吉野川を真ん中に両側の山々が迫ってきます。ここが秘境の地として知られる「大歩危・祖谷」の表玄関。文字通り歩いて険しい断崖が続く「歩危(ぼけ)」。そして、物事の始まりを意味する「祖」につながる「祖谷(いや)」。ここにあるのは、懐かしさと、危うさと、日本ならではの山の原風景。

山に分け入るには
 二つの目的がある
 「挑む心」と「逃れる心」

「分け入る」とは道を開いて進むこと
 険しい山に分け入り
 そこに新たな道を標す「挑む心」

深い山に分け入って
 そこに身を隠す「逃れる心」

新しい自分に出会うため
 ときには「挑む心」で山を目指す

挑むばかりは苦しいので
 ときには「逃れる心」で山に抱かれる

山に分け入るときめき
 山に分け入るやすらぎ

山に分け入るなつかしい発見の地
 大歩危・祖谷は



山に分け入る

天空の村 かかしの里

昔から祖谷の地には
二十五の名(集落)があると
言われてきました
森の中の孤島のように
山や谷に隔てられ
それぞれに個性的な集落
そこに続くひそやかな暮らし



名頃の新住民

「祖谷川といへるは菅生のおく、なごろといへるかたより流れ出る」

(祖谷山日記)

祖谷の最も奥地にある集落、それが「名頃」。「天空の里」とも呼ばれるこの地に人が住み始めたとされるのは、江戸時代の文化年間(一八〇四年〜一八一八年)です。比較的新しいこの集落は、戦後に道路やダムが造られ急速に発展しましたが、山を下りる人が増え、だんだんとさみしくなってきました。ところが、最近の名頃はなんだかにぎやか。不思議な住人が村のあちこちに出没し、声なき声を発しています。その住人とは、どこかの誰かに似ている「案山子」たち。平成十五年ころから出現し始めたこの「案山子」の生みの親は、大阪から帰ってきた綾野月美さん。「案山子」たちにはちゃんと住民台帳があり、名頃を訪れた人は自由に関覧することができます。

不思議な森の民

よく出会うおばあちゃん案山子は、まるで名頃の昔語りをしているよう。「ここはな昔、木地師という山の民が住んでおったんよ。木地師はろくろ師とも呼ぶんでよ。ろくろを回して木のお椀を作った。昔は、良い木を探して、山をあちこち訪ねてはそこに住むという暮らしをしておったんよ。そういう人々のことは、もう誰も忘れてしまうところけど、山にはそういう不思議な人の歴史も眠っとるんよ」



名頃小学校のかかし
平成24年春に廃校となった名頃小学校。子どもたちの姿が校舎や運動場から消えてしまいました。そこで、愛しいかかしたちが今も勉強を続けています。今では、「かかし祭り」の会場ともなる名頃小学校です。

茅葺き民家と 石垣の里

その昔、先人たちが

新たな地を目指した山の街道

山岳武士や木地師たちが行き交い

日本史を支えた人々のドラマが眠っている



山の上の街道

平成17年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、一躍名前が知られるようになった「落合集落」。山肌を蛇行する道沿いに貼り付くように人家があるこの風景は、この地では珍しいものではありません。その昔、山の街道は大半が尾根伝い。なぜならば、谷に近づくほど傾斜はきつくなり、岩肌も険しさを増し、危険を避けるには尾根伝いが理想だったのです。また、住むにしても上の方は日当たりが良く作物の栽培にも適していました。

その尾根伝いの道から、目的地の集落に下り、用が終わればまた上がるというふうで、その道沿いに集落が広がったのは、なんら不思議なことではありません。あまたの祖先がたどった山の道。はじめて訪れた人が「落合集落」にどこか懐かしさを感じるのは、そういう理由からでしょうか。ここに来れば、道や集落の原風景を今なお見ることができます。

雲海の村

「落合」は祖谷川と落合川が落ち合う地ということ。この名前が付けられました。それだけに、川霧が発生しやすく、ここでは雲海を見ることがしばしば。三所神社を境に線で引いたように、その上は雲海が漂います。この神社の社叢は、冷温帯樹と暖帯樹の巨木が自生するという珍しい樹林。徳島県の天然記念物に指定されています。

三所神社では、春祭り(旧暦の三月五日)と、夏祭り(旧暦の六月八日)、秋祭り(旧暦の八月五日)が行われ、だんじりや神輿が繰り出していました。時代と共に、だんじり巡行を見る事はできなくなりましたが、屋太鼓と呼ばれるだんじりの上では、おしろいを塗り、ひげを描き、華やかな着物を着た乗り子(子供たち)が太鼓をたたきます。



1) 急斜面に造られた山の畑は、下から上へへと土をかき上げながらの畑仕事。そうして、蕎麦や芋などを作ってきました。今でも当たり前のように、植物繊維で編んだ「蓑(みの)」が愛用されています。
2) 「ごうしいも」と呼ばれる小さなジャガイモ。祖谷のごちそう「ごうしいも」は、煮崩れしにくく、モチモチとした食感があります。

落合集落の
野良しごと。



南さんが足の痛みを取ってくれたと信仰する「三所神社」。折りに付け、集落の人が参拝しています。



3) 石垣を積み上げて造られた落合集落は眺めの良いことでも知られています。野良仕事の合間に庭先で味わう一服のお茶。山暮らしで味わう極上の時間です。
4) 干し柿・もちきび・カンコロ(干芋)など、山の暮らしには欠かせない常備食が庭先を彩ります。
5) 獣害から懸命に畑を守る番犬も山暮らしの心強い相棒。



1) 落合集落の民家は、今もなお茅葺き屋根が残っています。
2) 落合集落ガイドの南さん。
3) 古民家宿泊施設の内部



集落が力を合わせ
「落合集落」が人々に愛されるもう一つの理由。それは、ここが人力のみで生き抜いてきた祖先の暮らしを今なお教えてくれる村でもあるからです。急斜面の暮らしは今も大半は人力によります。小型のトラクターですら入りようがなく、狭い面積の畑仕事も機械に頼ることはできません。毎年雨や雪で崩れてくる石垣。石垣を築き直し、一畝ごとに土を上げ、落合の暮らしは守られてきました。

生まれ変わる古民家

落合集落では、家を建てるのも屋根を葺くのも、つい最近まで集落の人々が茅を持ち寄り、力を合わせて行ってきました。そうして、江戸時代から建てられたという古民家が残されてきたのです。けれども、集落の高齢化は止めようがなく、このままでは落合の集落を守っていくことはできません。そこで立ち上がったのが東洋文化研究家のアレックス・カー氏を中心とした「桃源郷祖谷の山里」プロジェクト。「日本の山里の美しさや伝統を、今にあった形で、持続可能なものとして残していく」というもので、外見は古民家の風情を残しながら、空調設備や床暖房などの最新設備を備えた宿泊施設が次々と誕生しています。

三所神社の奇跡

宿泊客に人気を呼んでいるのが、落合集落に住む南さんによるガイドツアー。落合集落の氏神さま「三所神社」に合祀している「聖神社」の移築の際、南さんは人力仕事の逸話として不思議な体験をしています。集落の12人の男たちが、力を合わせて大岩を運ぶことになりましたが、以前から南さんは足が痛く、この日もとうとうい役に立たないと思いつつ、どうにかこうにか手伝いをしたそうです。すると翌朝、痛かった足がうそのように治っていました。

民俗芸能を守り抜く里

昼間の森に現れる妖精
夜の森に響く拍子木
祖谷の民俗芸能は
美しくも不思議な世界を創り出す



山の離れ小島

見渡せば、そそり立つ岩肌や深い谷、あるいは天に向かう木立や深い森。大歩危・祖谷の地は周辺の地域から孤立してきただけでなく、それぞれの集落が自然環境に隔てられてきました。ですから、その集落ごとに個性的な伝統芸能や祭りなどが伝わっています。閉ざされた森の舞台で始まる季節の祭り、それらはその昔に日本のあちこちで見られた懐かしの情景かもしれません。

森の絵物語

もしかしたら神代から続いてきた踊りでしょうか。それほどに歴史を感じさせる「神代踊り^{じんたいおど}」。もともとは、笠踊り、太鼓踊りと呼ばれていましたが、大正時代に当時の皇太子(後の昭和天皇)の前で披露するという栄誉に恵まれ、「神代踊り」と呼ばれるようになりました。かつては、各地で踊られていた雨乞い踊りの素朴な姿をとどめる、国の重要無形民俗文化財です。

また、神代踊りを含む各地の「風流踊」はユネスコの無形文化遺産に登録されています。



なつかしの宵

そこは、真正正銘の森の狐島。深い木立に囲まれて、昼なお暗い後山の四所神社。阿弥陀堂の農村舞台がある広場だけ、まあるく青空がのぞきます。夜の帳が下りると降るような星空。けれども、今夜は月も星もかすみません。なぜならば、祭りのかがり火や提灯が赤々と点っているから。秋風が身にしむ季節、お接待の甘酒をすすりながら、温かい感動に浸る「禊からくり」。すっかり忘れていた「なつかしい祭りの宵」がここにあります。

かつて、日本中で人形浄瑠璃がもてはやされた時代がありました。激しい恋の道行きも艱難辛苦の人生も人形が演じることで、より感情移入することができました。それは、現代のアニメに通じるものがあるのかもしれませんが。娯楽の少ない山中では、やがて村の人々が自分たちの手で舞台を作り、人形を操り、その背景のふすま絵を描きました。その舞台転換を工夫している内に、糸を操って背景の襖絵を変えていくという「襖からくり」が誕生したのです。



祖谷の襖絵は、明治後期から大正時代の作と言われています。徳善や田ノ内地区など五ヶ所に約三百枚が保存されていました。特に後山では保存状態の良い襖絵が縁側の下から多数見つかりました。地元の人々が毎年、一枚一枚の襖絵や垂れ幕を虫干しし続けたおかげです。同時に、舞台の部材なども発見され、復元ができませんでした。そして、祖谷襖からくり保存会により襖からくりの特技を、今も見ることができます。



森の中の広場で色とりどりの衣装を着けた人々が、ひとりひとりと踊り出て輪になります。まるで懐かしい絵本のようにも見える「神代踊り」。踊りが終われば、またひとりひとりと森に消えていくように輪を離れて行きます。毎年旧暦の6月25日に善徳の天満宮神社で行われています。





都からの未来人

祖谷・大歩危の地には数々の伝説が伝わります。その一つが、ここに住み始めたという祖谷山の祖先の物語。「恵伊羅御子」と「小野老婆」という智恵や技術を持った人物が五穀の種を携えて、祖谷の山に分け入って集落を作り、機織りや農耕を広めたといわれています。二人が山に入ったのは天平勝宝四年（七五二年）とも言われていますが、この年は奈良の都で東大寺大仏の開眼供養が行われました。当時の祖谷で、狩猟などを主とする人々の暮らしは、まだ原始的だったのかもしれない。そこに都の先端テクノロジーを持ち込んだ人々は、崇敬を集め、祖谷開山の祖と慕われ続けました。情報が遮断された祖谷では、ゆつくりと歴史が動いていたのです。

恋をかなえ愛を守る

鎌倉時代に起こった元弘の乱により、土佐に流された尊良親王の後を追って、都からやってきた加羅宇多姫は、祖谷の山に分け入りこの地で若君を出産します。けれども過酷な山旅による早産のためか、介抱のまいなく小さな命を助けることはできませんでした。悲しみのなかで土佐に向かった姫ですが、すでに親王は九州に薨つた後でした。悲嘆に暮れて来た道をもどりましたが、産後の肥立ちが悪く帰らぬ人となってしまうました。旅路の山中で愛する人も愛し子も次々と失った姫。その悲しさは祖谷の谷底よりも深いものがあったことでしょう。その思いは、いつしか愛を請う女性たちの願いをかなえる強い信念となり、加羅宇多姫を祀る古宮神社は、恋愛成就や安産祈願を祈る女性たちの守り神となりました。

伝説の里

はるかな奈良時代や鎌倉時代を身近に感じる祖谷の地千年、五百年と変わらぬ風景や物語がここにはあるのです

古宮神社

ロッククライミングでも知られる古宮嶽の下にある古宮神社。山道をひたすら進んだその先に恋愛成就と安産の神様を祀っています。



若宮神社

西祖谷の中心地にある若宮神社。尊良親王と加羅宇多姫の愛の結晶は、本当にはかない命でした。今は子どもたちの健やかな成長を見守っています。



恵伊羅御子の墓

閑定名の小高い丘の上、通称「お山さん」にある「恵伊羅御子の墓」。見逃してしまいそうな小さな祠だが、今なお地元の人々が大切に花を手向けています。



早春の山は、まるで眠りから覚める少女。恥じらいながら、紅(べに)を点(さ)す頬(ほほ)のように、山の間になんかづつ色がよみがえってきます。ほんの少し登るだけで、山の温度は変わります。桜前線が里から頂に向けて移り変わるさま、紅葉前線が降りてくる山肌を見ることができます。



かくれんぼの情景
花と樹の詩
山はいつも詩人



祖谷の粉ひき節

祖谷のかずら橋や 蜘蛛の巣の如く
 風も吹かんのに ゆらゆらと
 吹かんのに 吹かんのに 風も
 風も吹かんのに ゆらゆらと
 祖谷のかずら橋や ゆらゆらゆれど
 主と手を引きや こわくない
 手を引きや 手を引きや 主と
 主と 手を引きや こわくない
 粉ひきはあさん お年はいくつ
 私じゃ引木と 同い年
 引木と 引木と 私じゃ
 私じゃ引木と 同い年

山の名物 Local specialties of a mountain

祖谷の粉ひき節 ものがたり

嫁の手仕事

祖谷の暮らしにとって、「粉ひき」はなくてはならない仕事です。米の収穫はほとんど見込めない山あいでは、麦、粟、黍、豆、そして蕎麦を主食代わりにしてきた時代が長くありました。麦の粉は「はったい粉」、蕎麦の粉は「そばきり」、粟や黍は餅や団子にして、ときには保存食として、あるときにはもてなしのごちそうとして食されてきました。

粉をひく作業は、祖谷の嫁たちの仕事。昼間は山で野良仕事、夜は夜で粉ひき作業。石臼を黙々と回していれば眠くならないわけが

ありません。そこで、「粉ひき節」を口ずさみながら、眠気を紛らわせていたのです。

「粉ひき節」は東祖谷を中心に歌い継がれ、それぞれの家であうたい文句には微妙な違いがありました。それらをまとめて、「祖谷の粉ひき節」や「祖谷の里唄」として楽譜に残したり、あるいはレコーディングが行われ、全国に知られるようになりました。仕事唄でありながら優美さを持つ「粉ひき節」。我慢強く、たくましく、ときにはなまめかしく美しく、手間暇かけて家族を支えてきた「日本の母」の姿が浮かび上がってきます。

祖谷そばができるまで。

1 種まき



祖谷地方では、ジャガイモの収穫を終えた畑にそばの種をまく「夏まき」。夏休みでうれしそうなお子どもたちの姿が見られる8月頃に種をまきます。

2 開花



山の秋が身に染みる9月頃、一面白い花で覆われるそば畑。そよ風に揺れる夢のような花畑。

3 刈り取り・天日干し



朝夕がめっきりと冷え込む10月頃、そばの刈り取りです。刈り取ったそばはハデ木に掛け、晩秋のお日様に干して一ヶ月間乾燥させます。

4 脱穀



乾燥が終われば、実を落とす脱穀です。昔はむしろの上に乾燥させたそばを広げ、唐竿（からさお）という道具でたたきようにして、そばの実を落としました。

5 粉ひき



嫁と姑がそば粉をひくと、仲が良いと風味の良い細やかな粉になり、仲が悪いと自分の方にばかり引張ろうとして荒いそば粉になったとか。

6 そば打ち



ひいたそば粉に水を入れて手でこねていきます。水はおいしいと言われる祖谷のわき水。祖谷で食べるとさらにおいしく感じるのは、水が良いからに違いありません。

7 のばす



台の上に打ち粉をふり、まずは手のひらで円盤状につぶします。それから麺棒でうすく延ばしていきます。90度麺棒の向きを変え、生地をまた麺棒にくると巻き付けて延ばすをくり返すと、生地は正方形に近づいてきます。

8 そば切り



こねたら丸めをくり返し、麺棒でのばし、折りたたんで包丁で切ります。名人の力加減、早業には目を見張ります。

9 できあがり



沸騰したお湯に、そばをほぐし入れ、お湯が再び沸騰したら差し水をします。おいしくて、どこかつかい祖谷そばのできあがり。



食文化が山の暮らしを彩ってきたのです。例えば、「そば米」はそばの実を塩ゆでして、からをむき、乾燥させて作ります。この「そば米」を使った「そば米雑炊」は、祖谷地方の有名な郷土料理です。

古くから山の常食であった「蕎麦」。阿波志によれば、「瘠田之を播く、養は灰を以てす」とあり、米の実らないやせた畑にそばを植えたことが分かります。その畑の多くは焼畑で、祖谷では昭和四十年頃まで焼畑が行われ、祖谷のそばは「焼畑の蕎麦」として知られていました。山の暮らしでそばが必要なのは、貯蔵性が良いことも上げられます。そば米、そばねり、麺そば、そば団子、そば粉とさまざまな形にして食されてきました。そばの豊富な食文化が山の暮らしを彩ってきたのです。

理。その始まりは、平家の落人たちが、都をしのいで正月料理に作ったとも言われています。祖谷では、人が集まれば必ず「祖谷そば」がふるまわれます。何十人というお客があるときには、嫁と姑が夜なべ仕事でそば粉をひきました。ふと夜中に目を覚ますと、黙々と石臼を回す母の姿があったのです。「祖谷そば」は、それぞれの家庭で作られてきたもので、本来はつなぎの粉を一切入れず、麺が太く切れやすいのが特徴でした。今では、それぞれの店により、食感を工夫していますが、そば本来の風味が立つのは今も昔も変わりません。小さな、小さなそばの実に祖谷の大自然が詰まっているように思える「祖谷そば」。一杯の「祖谷そば」には、山の歴史や暮らし、思い出も詰まっているのです。





1)「おいしいお茶は霧が育てる」とも言われますが、この地域では季節の変わり目に「八合霧」が発生します。「八合霧」とは、寒暖差が激しい朝に谷川から山肌をはい上がるようにかかる霧(雲海)のこと。この「八合霧」によって、甘みと渋みのバランスがとれたおいしいお茶を収穫することができます。

2)山の神に感謝しながら、丁寧に手摘みされる秘境のお茶



先代から伝わる平松製茶工場で、緑茶と番茶が作られています。手作り感を残す製造工程も「有瀬茶」の魅力。

山の名物
Local specialties
of a mountain

天空に香るお茶ものがたり



川内さんのお茶畑は、家の裏山、山猿も転げ落ちるという急斜面にあります。

清らかな気に満ちて

川霧が立ち昇り、南に向けて山上の太陽が降り注ぐ、清らかな気に満ちあふれる大歩危・祖谷は、良質なお茶の産地でもあります。山の自然が育んだ健やかな味が体に心にも渡ります。

なかでも「有瀬茶」や「山城茶」は、おいしいお茶として知られ、地元のみならず近隣の人々にも愛飲されてきました。

茶摘み唄の里「有瀬」

高知県境に近い「有瀬」は、祖谷随一のお茶の産地。南に向かって吉野川を見下ろす眺望は息をのむほどに美しく、朝の光を浴びて茶畑に立つと、隠れ里に住む幸福感にふれることができます。

この地で代々、お茶づくりに励んできた平松さんは、茶畑のみならず製茶工場も営んでいます。「製茶工場」というのも、おやじの代からの素朴な機械やから、人の手に頼つとんのがよ。微妙なあんばいを調整するのは、やっぱり手加減。手もみに近いお茶よ。」

民謡の宝庫祖谷には「茶のみ唄」が伝わります。
へお茶をつかむなりやノーホイノーホイ
三度におつみ 根葉に天葉に
まわりづみ ションガエー

この唄を口ずさみながら、その昔から祖谷の人々の手仕事で育まれてきたお茶。「静岡のお茶も、もとはと言えば、祖谷の茶の苗が東海道を旅して届けられたもんよ」と、そんな話も語り継がれてきました。

かつて、この地には七組合の工場があり、「有瀬茶」は紙袋に詰められ出荷されていました。その後、旧西祖谷の役場が率先して「かずら橋茶」というブランド名もつけられたそうで

す。そんな「有瀬茶」も現在では、平松さんただ一人が守っています。

妖怪も大好き? 「山城茶」

今や妖怪で知られる「山城」地区。この地のお茶も昔から有名で、明治初年から道中の苦勞を乗り越え、はるばる阪神地方に販売された歴史があります。また三名村時代の昭和五年には祖谷の人々にも呼びかけて、「祖三製茶販売利用組合」が設立され、いち早く製茶工場を建設しましたが台風で倒壊。戦後の昭和三十一年になって、「三名村農業協同組合」の工場が小学校の旧校舎を利用して完成しました。やがて、農協から独立する形で茶業組合が設立され、現在の「山城茶業組合」の歴史につながります。その組合からは、山城名物の「妖怪茶」も誕生しました。

山城茶業組合の立ち上げに当初から関わり、現在は会計理事を務める川内さんは、四国の秘境山城大歩危妖怪村の理事でもあります。その庭先には、妖怪ならぬ都からやってきたというお姫さまの祠があります。吉野川の上流と下流が見渡せるここは、昔から旅の重要拠点。山城のお茶は旅人のかわいた喉を潤し、そのおいしさが口々に伝わったことで

天空の山茶



この地の自生茶は、可憐な花の下に「ゴボウ根」といわれる根を地中深くまで張り巡らせています。そのため強靱な生命力にあふれ、ほとんど手をかけず山の畑で生き延びてきました。「天空の山茶」を飲めば「寿命が延びる心地がする」という声が聞こえてくるのは、そういう理由からでしょうか。

吉野川を見下ろす大歩危・祖谷の急斜面、山肌に貼り付くような自然の茶畑。日本茶の原種とも言えるこの自生茶が今注目を集めています。

自然界の茶は「異株結果」、異なった株の花同士で結実します。そこで栽培種である「やぶきた」は、挿し木により品質の安定した茶を目指してきました。それに反して、自生茶は実に多種多様な茶の木が交配するため、一つとして同じモノがないくらい個性的なお茶となります。

もちろん、大歩危・祖谷も「やぶきた」種が導入されましたが、それぞれの家庭で自家製のお茶を作り続けてきたため、あちこちに自生茶が残されてきました。また、焼畑や木材の伐採地にも自生茶が広がりました。こうして、大歩危・祖谷には、長い年月をかけて自然交配され、丸い葉や細長い葉とさまざまな葉が見られる自生茶が多くあるのです。そして、この自生茶は、今まで味わったことがないような深い味わいのお茶となるのが分かりました。

そこで、この「山茶」をブランド化して、多くの人に味わってもらおうというのが「天空の山茶」です。その条件は、天空の郷

に自生する自然の姿をそのまま守ること。

もちろん完全無農薬、その上、肥料も施していません。昔ながらに刈り込んだ「カヤ」を敷き詰めるだけ。あまりにも自然のまま育てているので、ときには遅霜に遭ってお茶の葉が焼けてしまうことも。ですから、来年の収穫は全く予想できないという「天空の山茶」。

巡り会えたなら、しっかり味わっていただきたい奇跡の二服です。



「天空の山茶」は祖谷や大歩危で自生してきた茶の木。そのため、それぞれ個性的で独特のブレンドが生まれます。そこそが、山の恵みのひとしずくなのです。

手揉み番茶

大歩危・祖谷では、今でも自家製のお茶を作る家が当たり前のようにあります。庭や畑の一部にお茶の木が植えられていて、初夏に摘み取り、手で揉み、天日で干して仕上げます。

その自家製法を生かして作られるのが山城茶業組合の「番茶」。普通の番茶は、一番茶を使いませんが、ここでは一番茶を使い、昔ながらの手揉みの技で揉まれる上に天日に干して乾かします(現在では衛生上の問題でさらに念入りに機械で乾燥させています)。こうして、自然の味わいを大切にした日干し手揉み番茶「見啼爺茶」が完成します。また、水出しでも飲めるという「上番茶」も人気です。



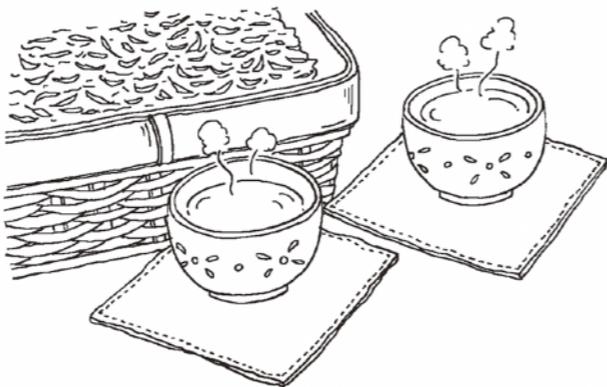
1 5月下旬から6月上旬にかけてが茶摘みのピーク。近所の人たちで集まって行なうのが習わしです。



2 摘み取られた茶葉は、悪い茶葉を退ける選別作業を経て大釜に入れられ、薪を燃やして炒られます。



3 手作業でじっくり揉んだ後、数日間ムシロに茶葉を広げ天日干しをします。



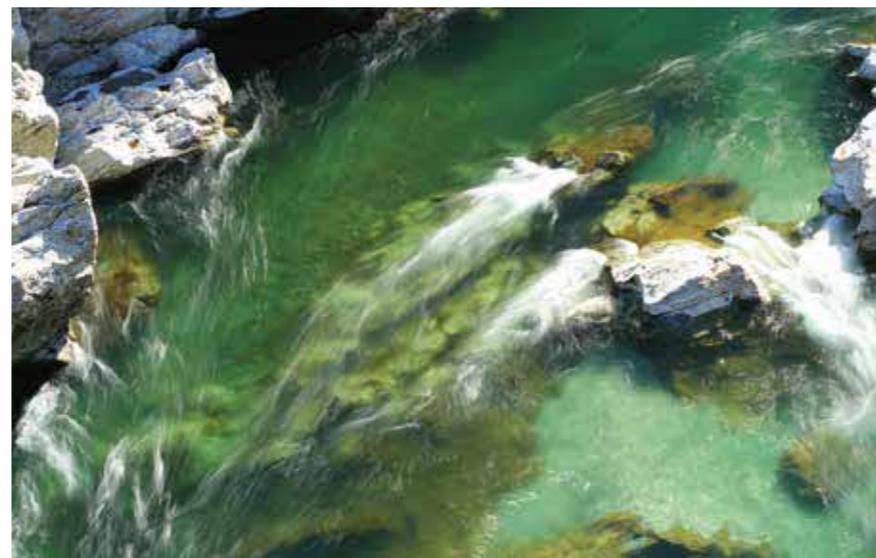
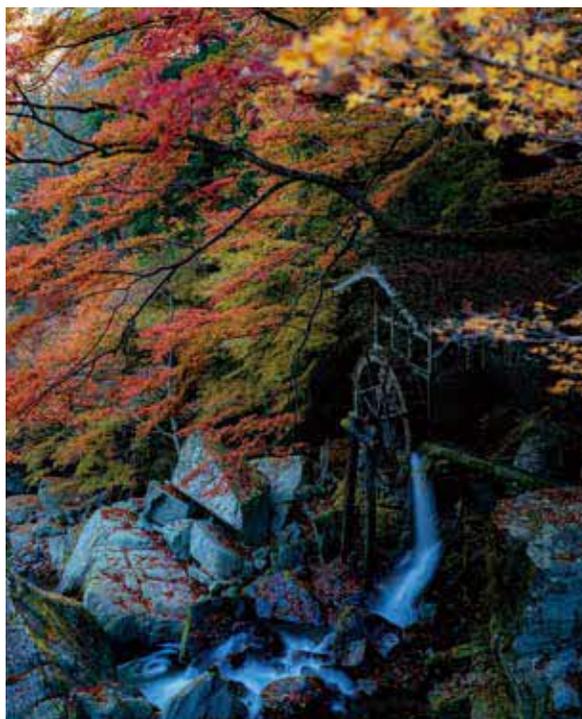
4 鉄釜で炒られた茶葉は、煮出すと茶色が濃く深みがあり、甘みと渋みが絶妙。お茶本来の香ばしい香りがたどまいます。



自家製のお茶は大きな缶に保存されます。そこから、必要な分だけ取り出して飲みます。その味は、家庭によってわずかに違うのですが、どれも味が良く、心からほのぼのとするお茶の時間が広がります。



かくれんぼの情景
溪谷アート
 自然はやっぱり美の魔術師



溪谷の「行く川の流れ」。毎日見ている人でさえ同じ日はないと言うほど、「一期一会」を教えてください。ただ流れを見ているだけで、心が洗われてくるよう。

祖谷溪谷が中ほどの峯を挟んで、ひらがなの「ひ」の字に見える「ひの字溪谷」。世界に認められた溪谷美の代表です。



心の底から美に染まる「大歩危・祖谷」の休日。山肌も水も季節ごとに趣を変え、自然の筆遣いは微妙に変化します。吉野川の川下りは晩秋から冬にかけていよいよ水が澄み、透明感あふれる水面の美しさに言葉が失われます。







吉野川グリーン

流れに挑む

山も緑、流れも緑。例えば「千歳緑」の深い緑から、「白緑」の爽やかな緑まで、さまざまな緑に染まる大歩危一帯は、全国各地のカヌーイストやラフティング愛好家に高く評価されている、日本有数の川遊びポイント。

訪れた人々は、まず川岸で水の美しさに歓声を上げます。何よりここは通年水量が豊富で、その気になれば一年中遊べるほど。「こういう川は意外と少ない」と、カヌーの専門家は語ります。北国は当然ながら冬に川遊びはできません。南の川に行けば、真夏に水が涸れてしまうことが少なくありません。ところが、吉野川は真夏も真冬も豊かな川の流れに恵まれています。ですから、ここに住んでカヌーやラフティングの腕を磨きたい



と思う人が多くなりました。

ちなみに、個人ではなく業者が開催するラフティングツアーをコマージュラフティングと呼びますが、日本で初めてコマージュラフティングが行われたのは、ここ吉野川です。

流れに浮かぶ

今ではラフティングボートでにぎわう吉野川。はるか昔、その水面に浮かんでいたのは「かんどり舟」という素朴な舟でした。

明治二十四〜二十五年ころ、日本の難所と言われていた大歩危・小歩危も国道の開通によって、多くの人が訪れるところとなりました。そこで、観光客のためにかんどり舟で川魚の漁を始めた人物がいました。川を上り下りしている内に景観の素晴らしさに心打たれ、宿泊客などを乗せての大歩危観光遊覧が始まりとされています。

今では安定感のある動力船での運航となった「大歩危峡観光遊覧船」。ラフティングやカヌーには年齢制限がありますが、遊覧船ならば赤ちゃん連れでも安心して川遊びを楽しめます。間近に見る事のできる美しい岩石やV字谷の様子から日本列島の成り立ちを感じる事ができます。



億年前の記憶

平成26年3月、大歩危は国の天然記念物に指定されました。大歩危の岩石は、2億年前から1億年ほど前に海底深く生まれたもので、学名を結晶片岩と言います。

かずら橋の夢

切られる運命の橋が夢見たのは
永遠に切れない人の絆



平家の落人が追つ手を逃れるために、切り落とせるようにと、この橋を架けたとも伝わる「かずら橋」。昔のかずら橋はゆらゆらと実に頼りない浮き橋でした。

江戸から明治にかけて、祖谷には十三のかずら橋があったと言いますが、一度は全てのかずら橋が姿を消してしまいました。その後、昭和三年に有志の手によって善徳のかずら橋がよみがえります。

この橋は、暮らしの橋と言うより観光資源として再び架けられたものでした。ですから、見かけとは違って、より確かな橋、より安全な橋梁を目指して進化が続けます。そのため、三年ごとに切り落とされ、再び強固に掛け替えられています。

とはいえ、このかずら橋は水面から十四メートルのところにあり、長さ四十五メートルもあります。「さなぎ」と呼ばれる橋の底に敷かれた木

片の間からは、水しぶきを上げて流れる渓谷を眺めることができ、また一足ごとにゆらゆら揺れるので、人々はドキドキするようなスリルを味わうことができます。ちなみに、心理学的にも共にドキドキするような時間を持つと、その二人は恋に落ちやすいとか。

ほかにも頼り合って渡る家族、励まし合って渡る仲間と、切り落とすための橋は切っても切れない人の絆を深めてきました。

地元保存会「かずら橋保存会」による三年に一度の架け替えは、その持続可能な取り組みが評価され、2023年「世界の持続可能な観光地トップ100選」に選ばれました。



奥祖谷二重かずら橋

「祖谷のかずら橋」から車で約1時間、奥祖谷にも二つのかずら橋が架けられています。素朴な面影を残す「奥祖谷二重かずら橋」は男橋と女橋があります。



以前は、架け替えの度に古い橋が切り落とされてきましたが、現在は解体工事が行われます。

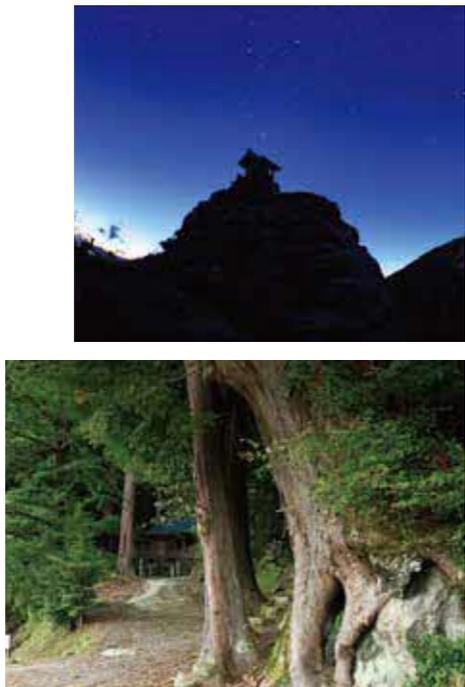


架け替え作業中の橋。見学することしかできませんが、最もスリリングな状態です。



現在の橋は、もちろんかずらだけではなく、頑丈なワイヤーが補強の役目を担っています。

かずら橋の架け替え作業



平家伝説が幾つも残る祖谷の地。安徳帝のご火葬場跡やおまつりした神社もあり、国盛が植えたという「鉾杉」や「平家の赤旗」も伝えられてきました。

真実を隠す山

祖谷の山はたくさん秘密を抱えています。秘密を守るために山中に分け入った人もおりました。その代表が平家の落人たちです。

平安時代におこった源平合戦は、日本全土を舞台に繰り広げられ、後に紅白戦の語源にもなったといわれています。日本史を動かした一大センセーションで、その逸話は各地で語り継がれ、数々の落人伝説が残されてきました。祖谷では落人伝説を、子ども頃から繰り返し聞いて育った人が大勢います。



祖谷の地に永住した国盛一族、その屋敷は巨木の森を背に今もひっそりとたたずんでいます。

ときに伝説は史実と異なることがあります。その秘密を解き明かすには、ずいぶんと時が経ってしまいました。ただ、そういう話が語り継がれてきたというのは、まぎれもない事実。そこには語り部たちが伝えたかった真実が隠されているはずですよ。

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす
おごれる人も久しからず ただ春の夜の夢のごとし
たけき者もついには滅びぬ ひとえに風の前の塵に同じ

〈平家物語 冒頭より〉



祖谷の地に伝わる平家の赤旗に記された紋章は「むかい揚羽」

この地では、屋島の合戦に敗れた平国盛一族は、安徳天皇をお守りして讃岐山脈を越え、祖谷の地で過ごされたと伝えられています。真実か否か、まずはこの地に足を踏み入れてその史跡を訪ねてみてください。



豆腐・歩危あげ・祖谷こんにゃく

山の豆腐は、険しい道を通っても崩れないよう歯ごたえがあります。また「ぼけあげ」と呼ばれる大きな「お揚げ」は出汁をよく吸うので、おでんや汁物などにおすすめ。地元のこんにゃく芋で作るこんにゃくは弾力も心地よい。



ジビエ料理

捕獲鳥獣を有効活用し、地域の豊かな自然が育んだ猪肉や猪肉のジビエ料理を提供する店舗が多くあります。



でこまわし・あめごの塩焼き

「ごうしいも」と呼ばれるジャガイモや豆腐、こんにゃくを竹串に刺し、味噌だれを付けて炭火で焼く田楽。「でこ」とは人形のこと、回しながら焼く様子から「でこまわし」と呼ばれています。あめごや鮎などを炭火で焼くのも絶品。



ひらら焼き

河原の石をホットプレート代わりにして、鮎やあめご、こんにゃくや豆腐などを焼き上げます。周囲には味噌の土手を作るので、香ばしいにおいがたまりません。「ひらら」とは「平たい石」のことです。

雑穀もち

昔から会合などの際は、米や小麦、粟、きびなどを使って、餅や団子が作られてきました。今も山の素材を使って、カラフルな餅や団子が作られています。



味めぐり

大歩危・祖谷の

山の奥り川の恵み

美味しい秘密



「赤子淵を通ると、赤ん坊の泣き声が聞こえる」やら、「峠の木立に旅人の着物だけが引っかけられていた」やら、旅の危険を知らせてきたという山城の妖怪も、今では「妖怪スイーツかっぱ〜な」などの味わい深いメニューに姿を変えて旅人に喜ばれています。



山の秘密

妖怪が生きる森

大歩危・祖谷にある山城地区は、世界妖怪協会から「怪遺産」に認定されるほどの妖怪の宝庫。およそ六十種、百五十ヶ所に妖怪や憑きもの、たりなどの伝説が残されてきました。

山の暮らしは、不思議に満ちています。風の音、水の流れ、木立のうなり、獣の声、静寂の奥から何かの気配が確かに忍び寄ってきます。山の暮らしは、危険にも満ちています。その昔の大歩危小歩危、歩足を踏み外せば深い谷底に落ちていくしかなかったのです。ですから、山の人は危険を知らせるために、また不思議を納得させるために、「妖怪」を出現させました。ときには、秘密を守るためにも…。

いえ、山城ではホントに妖怪と出会ったという人、遊んだという人までいます。この秘境には、例えばUMAと呼ばれる未確認動物が時代を超えて生存できたのかもしれない。そして、それ以上に人々の想像力をかきたてる不思議な山や森がそこに立ちはだかつてきました。

ひとつひとつの妖怪伝説をたどると、そこには子どもたちや旅人に教えずやさしい心、哀れな人、はかなき人を思いやる温かい心が見えてきたりもします。山城では、妖怪が暮らしに寄り添い、共存してきたのです。それにしても、日本全国、妖怪が暮らしにくくなった土地ばかり。きっと、

今では日本中の妖怪がこの地に逃げ延びてきているに違いありません。背後に山々が連なることから「ヤマウシロ」と呼ばれたのが、地名の由来という「山城」。この森でそっと目を閉じ「ウシロの正面だくれ」とつぶやくと、そのウシロには不思議な何物かが立っているのでは…。







「大歩危・祖谷」の魅力が深まる山の夜。灯りのない山間は、空も山も川も濃いブルーに沈み、そのグラデーションが人々を魅了します。かすかな音が耳に届く、夜のしじま。どこかで燃える炎の音が温かく心に響くほど。



たくさんの物語が生まれる山の夜。幾夜も語り継がれた伝説の夜。魔物や妖怪、お姫様や落人が闊歩する一夜。人の声の心地よさが心に染みる夜。夜は寄る。心寄せ合い、寄り添い合い、語り合う夜を過ごしましょう。



山のおもてなし 山暮らしの夜

山の本当の魅力は、
その多くが夜に潜んでいるのかもしれない。
たとえ一夜でも山の住人になって、
山暮らしの夜の楽しみを手に入れていただきたい。
ここには、ゆったりと山の暮らしを楽しみたいような、
そんな心地よい宿がいくつもあります。



大歩危・祖谷には温泉郷があります。自然のなかでお湯につかる開放感。雪景色を見ながら、山の頂を仰ぎながら、渓谷のせせらぎを聞きながら、森の緑を映しながら、木漏れ日とお湯の輝きにほほ笑みながら温泉を楽しむ幸せ。はるばる足を運び、山に分け入り、難所を抜けてたどり着いた秘境の温泉郷。昔から、ここには芯から心を温めてくれる秘湯が待っているのです。温泉宿でのんびりと過ごせば、いつしか山並みはたそがれブルーに沈み、やがて漆黒の空に満天の星が輝きます。夕暮れには温泉の湯気にごちそうの湯気が加わって、忘れられない一夜が始まります。



大歩危・祖谷には
 独特の時間がある
 時間に追われることもなく
 時間を追い越す必要もない
 ゆっくりと思いをたどり
 自分の心の奥底をのぞき見る
 昔の人々の言葉に耳を傾け
 自然体で進むべき未来を見つめる
 不思議の世界に恐れおののき
 ヒトが挑むべきことと
 謙虚に祈るべきことが分かってくる
 そんなかけがえのない時間を
 ここで過ごしたい
 そのために大歩危・祖谷には
 ゆっくりと身を浸す
 温泉も用意されている



平国盛が安徳天皇をお守りして祖谷の地に入ったときに、温泉を見つけて湯治をしたとも伝わるこの地の温泉。事実であれば、天皇さまが入った温泉ということになります。「フロノタニ」という地名も残っていて、かつては渓谷の川に沿って所々温泉が湧いていました。今も渓谷に沿って、温泉宿が点々とあります。山に包まれて温泉につかる幸せ、裸になって季節の風景に染まる幸せ、ゆっくりと時が流れる幸せ。大歩危・祖谷の幸せは、人が人らしく、等身大の自分自身に気づく幸せかもしれません。

